

平成 25 年度第 3 回「大村知事と語る会」意見交換要旨

- 1 日 時 平成 25 年 11 月 17 日（日）午後 2 時 30 分から午後 4 時 30 分まで
- 2 場 所 名古屋国際会議場 会議室 131・132
- 3 テーマ 学生と語る環境活動

－ESD ユネスコ世界会議を契機とした環境活動の発展！－

4 意見交換者（五十音順 敬称略）

- 川口 彩 日本福祉大学社会福祉学部 2 年（きのこクラブ）
川村 絵梨子 大同大学工学部 3 年（命をつなぐ PROJECT 学生実行委員会）
後藤 友美 愛知淑徳大学ビジネス学部 3 年（ベジーガガ）
杉原 秀教 中部大学応用生物学部 3 年（中部大学ボランティア・NPO センター）
濱口 静加 名城大学農学部 3 年（名城大学ボランティア協議会）
古田 千佳 金城学院大学現代文化学部 3 年（金城里山コンサベーション）
水野 陽介 名古屋大学情報文化学部 3 年（We C h u b u）

【川口】

皆さん、こんにちは。今紹介いただきました川口彩です。今日のために私はきのこへアにしてきました。よろしくお願いいたします。

きのこクラブの具体的な活動、今後の方向性について御紹介させていただきます。

こちらが私の日本福祉大学の概要になっているので、ご覧ください。

まず、きのこクラブの発足経緯から活動内容について御紹介します。

私はもともと自然とかかわることが好きで、大学に入学し、美浜町竹林整備事業化協議会、通称「モリビトの会」という団体が行う活動に参加しました。

知多半島では、放置された竹林が問題視されています。その放置竹林を有効に活用しようとする団体がモリビトの会という団体です。明るい里山を再生すべく活動することに、私はやりがいを感じました。そして、自分たちも同じような活動をしたいと、きのこクラブを立ち上げました。

きのこクラブは、誰もが自然とかかわる楽しさを感じ、保全活動につなげることを目指す環境系サークルです。私たちのクラブは、先ほど説明してもらったあいち森と緑づくり税により、美浜キャンパス内にある里山を整備していただきました。その遊歩道を主な活

動拠点としています。

大学の横に設置される予定の看板デザインがこちらになります。オレンジ色の線のところが遊歩道になります。遊歩道はまだ完成しておらず、でも今年中に完成する予定になっております。

クラブ発足後、まずメンバーを増やすため、食を通した活動をきっかけにクラブに興味を持ってもらおうと考えました。私たちが行う活動をフェイスブックで発信したり、口コミで声かけしたりすることにより、興味を持ってくれた人には次の活動にも参加してもらおうという形をとっております。このように、私たちはできることから少しずつ活動してきました。

主な様子を次のスライドに載せましたので、ご覧ください。

まずは、左上の写真を紹介します。こちらは7月に大学内で収穫したヤマモモを使用して作ったレアチーズケーキになります。ヤマモモは、矢印のところに載っているんですが、こんな小さな実になります。

次に、隣の写真を紹介します。こちらは「美浜きのこらんど」というキノコの生産施設に見学に行ったときの写真です。そこのきのこらんどで購入したヤナギマツタケを調理したものがこちらになります。ヤナギマツタケは愛知県で登録された幻のキノコになります。

左下の写真は、今年の10月に大学内で収穫した椎の実をフライパンで煎って殻をむいているときの写真になります。椎の実は煎ってそのまま食べることもできます。そのほかにも、椎の実を砕いて椎の実コーヒーにしたり、椎の実クッキーなどにして食べることもできます。

このような食を通した活動を行うことで、クラブメンバーが増えるきっかけになるとともに、自然のありがたみを実感し、環境活動に対する関心の向上、活動への参加につながっていくと実感しました。

こちらは、2週間ほど前に開催した秋の味覚狩りツアーになります。こちらでは大学生や大学関係者等合わせて18名の参加となり、その中には車椅子の学生の参加もありました。みんなで大学周辺にある自然の恵みを収穫したり、また、地元農家の方の御厚意によりミカン狩りをさせていただいたりもしました。

また、先ほどの秋の味覚狩りツアーを通し、車椅子の方も十分な支援があれば森の中に入ることが可能だと実感しました。私たちの日本福祉大学には多くの障害学生が在籍しています。そのため、障害がある方も私たちと同じように活動を楽しめるようにしていくこ

とが、私たちの福祉の大学ならではだと思っています。

これまで一般的に障害のある方が森の中に入っていくことは少しハードルが高いように思われてきたかもしれませんが。しかし、皆さん、一度目を閉じ想像してみてください。たとえ目が不自由な人でも森の音を感じ、森をより身近に、たとえ耳が聞こえない人でも森の息吹を肌で感じたり、森の生き物を感じることができます。このように私たちと同じように森や自然の存在を感じることができます。森は感性に訴えかける空間ですので、五感を持ち、誰もが森を感じることは可能です。

私たちの活動は、自然の恵みを活用した食を通じ、そのありがたみを感じるまででまだとどまっています。しかし、今後は、学内にとどまらず、外に出て行き、地域の方々と連携し、そして障害のある方も一緒になり環境活動を展開していくことを目標としています。

私たちだけではまだまだ力不足なところがありますので、先ほど紹介したモリビトの会や学外とのネットワークを築きながら、学ばせていただいたり、助け合いの輪を広げたいと思っています。

さらに、こうして今回、環境活動に取り組む各大学の方々と知り合うきっかけをつくっていただきました。このように様々な大学やいろいろな組織が連携し、たくさんの方が一緒になって環境活動を盛り上げられるといいなと思います。そこには障害のある方や車椅子に乗った高齢者など、誰もが対象となる取り組みを目指したいです。そのような取り組みの企画運営に愛知県職員の方々にもかかわっていただき、県のホームページや広報紙でイベントのPRをしていただけると幸いに思います。

以上できのクラブの発表を終わります。御清聴ありがとうございました。(拍手)

【大村知事】

ありがとうございました。

あれは大学の周りの里山ですね。

【川口】

はい、整備していただいた遊歩道になります。

【大村知事】

その髪の毛は今日のためにくりくりしてきたのですか。いや、事前にもらっている写真と違うから。

【川口】

マイタケヘアにしてみました。

【大村知事】

それはそれは、ありがとうございました。

それでは、また後ほどさらに御発言いただきたいと思います。

続きまして、川村絵梨子さん、よろしく願いいたします。

【川村】

皆さん、こんにちは。私たちは、命をつなぐ **PROJECT** の学生、**NPO** 法人を中心に、知多半島の 11 社の企業を生かして、命と地域を緑でつなぐ活動をしています。

命をつなぐ **PROJECT** は、ビオトープ班と巣箱づくり班とアニマルパスウェイ班の三つの班で構成されています。

まず、ビオトープ班は、企業がつくったビオトープの整備を学生が協力して行っています。これは自然のままが一番いいのですが、人の手を借りないと水が濁ってしまったり、植物がだめになってしまったり、動物が来なくなってしまうから、こういう活動を行っています。巣箱づくり班は、シジュウカラというとても小さい鳥のために巣箱をつくり設置する活動を行っています。アニマルパスウェイ班は、フェンスなどの仕切りでキツネやタヌキ、ウサギ、ネコ、カルガモなどの動物の行動範囲を狭くしないように、フェンスの下に穴をつくってあげて、より広い範囲で活動できるようにしています。

この三つの、ビオトープ班と巣箱づくり班とアニマルパスウェイ班の様子をフリーペーパーで作成しています。毎週水曜日と木曜日に会議が開かれて、20 人弱の人数が集まります。去年の 10 月から今までフリーペーパーを 4 巻発行していて、この中の撮影のポーズとかは、学生がユニークに、楽しんで見てもらえるように撮影しています。写真の真ん中と一番左のものは会議の雰囲気の写真で、一番右がフリーペーパーに載せる写真撮影の様子です。

このフリーペーパーは、設置場所が知多と東海の市役所や名鉄の 22 カ所でまだまだ知名度がすごい少ないので、これから学生や **NPO** 法人さんと協力して設置場所を増やしていけたらいいなと考えています。

フリーペーパーの内容のほかにも、企業の緑地に行かせてもらって見学させてもらって、その緑地の紹介を載せたりとか、緑地整備の活動、これは竹の伐採ですけど、出光さんに依頼されて学生で竹を切って、光を入れて竹が育ちやすくするような活動に協力しています。あとは、ほかの自然環境にかかわるサークルさんの紹介をフリーペーパーに載せたり、歌手の **MISIA** さんや中日ドラゴンズの浅尾拓也投手がフリーペーパーに協力してくれた

りしています。

一番左の写真は、今年2月に愛知環境賞を受賞したときの写真です。

命をつなぐPROJECTは、新聞にも掲載されています。

私たち命をつなぐPROJECTは、環境活動を盛り上げるためのアイデアとして、ラジオの宣伝だったり、愛知県出身のアーティストでスキマスイッチさんとか玉木宏さんとかソナーポケットさんに取材を協力してもらったり、愛知県の御当地キャラクターのオカザえもんやモリゾー・キッコロを使わせてもらうというアイデアを出させていただきます。

以上です。ありがとうございます。(拍手)

【大村知事】

ありがとうございました。

去年、私、最初のキックオフのときに行ったよね、たしかね。

あの竹林はちなみにどこですか、竹伐採。

【川村】

出光さんの工場の緑地です。

【大村知事】

分かりました。また後ほど意見を聞かせていただきたいと思います。

続きまして、後藤友美さん、よろしく願いいたします。

【後藤】

本日は、このようなすばらしい会にお招きいただきましてありがとうございます。御紹介にあずかりました愛知淑徳大学ビジネス学部、「ベジーガガ」の後藤友美と申します。本日はどうぞよろしく願いいたします。

まず、ベジーガガという団体名の由来からお話しさせてください。

ベジーガガは、あの世界的大スター「レディーガガ」と「ベジタブル」を掛け合わせた言葉です。レディーガガのように、個性的でも信念を貫き愛される団体へと成長したいという願いが込められています。

そんな私たちは、ある環境問題を解決すべく、日々活動を行っています。それは、食料廃棄問題です。皆さんが、家の近くにあるスーパーに立ち寄ると、目に映るものは何ですか。色とりどりの野菜や海産物、種類が豊富な加工品、どれもきれいなものばかりですよ。そこに並べられた商品は、ある意味様々な競争を乗り越えてきたものなんです。では、当然その競争に負けてしまう商品もあります。私たちはそこに焦点を合わせ、負けてしま

った商品を助ける活動を行っています。

その中でも私たちが扱っているものは、規格外野菜と呼ばれるものです。今日はその規格外野菜を持ってきました。例えばこのリンゴですが、一見どちらが規格外かわかりませんよね。しかし、こう見ていただくと、こちらのリンゴのほうだけ少し傷が入ってしまっているんです。こちらのキュウリも、真っすぐなもの比べると曲がってしまっています。こういったものが規格外野菜と呼ばれるもので、品質には問題ないのにかかわらず、市場に出ることなく廃棄されているのが現状です。こんなもったいないことはないですよ。そのため、私たちは規格外野菜を農家から買い取っています。そして、加工し商品化することで規格外野菜を販売できる商品に変身させています。

そんな私たちは、2010年3月に活動を開始しました。今では4代目、5代目と受け継がれ、10名で活動を行っています。私たちの強みは、何ととっても女子大生で構成されているメンバーであることです。女性ならではのアイデアや観点から規格外野菜に付加価値を与えることを大切にしています。そのため、活動を行うときのコスチュームは、私たちでデザインを考え、製作したものばかりです。私が着ているこのエプロンもその一つです。今日は私の仲間が傍聴席に来ていて、それぞれコスチュームを着ているんですが、農作業を行うときのつなぎや製造販売のときに使うエプロンを身につけています。私たちがデザインを考えています。このエプロンも、刺しゅうは私たちが頑張ってやりました。

そして、こちらがベジータの商品です。こちらはクッキングスタジオ「マダムアリス」とのコラボレーション商品となります。パリの朝食をテーマとしたベリアーヌシリーズや、季節の野菜に合わせた商品を開発しました。こちらは「ニコリファクトリー」とのコラボレーション商品です。ニコリファクトリーさんの特徴を生かし、長久手産米粉を使用しているところがポイントです。私たちは今まで計19商品を開発してきました。

こちらが販売の写真です。規格外野菜から生まれた商品のため、売れないのではと心配する声もありました。しかし、1カ月半に1回のペースで行うイベント販売では、商品は常に完売しております。私たちの応援に、こちらの写真に写っている男性の方ですが、埼玉県からわざわざお越しいただくこともあります。

日本の食料の現状ですが、私たちは年間550万トンの食料を輸入しています。しかしながら、全体の30%に当たる1,800万トンも捨てているのが現状です。日本は食料の半分以上を輸入しながら、残飯のとても多い国なのです。

では、ここで一つ疑問が生まれませんか。廃棄されている全ての食料は本当にもう食べ

られないものばかりかということです。

実は、食べられるにもかかわらず廃棄されているものの食品ロスは約 800 万トンもあると言われていています。廃棄食料のうち、肥料などに再利用されているものはわずか 25%にすぎません。その他はほぼ全てが焼却処分されています。この焼却処分ですべて排出された CO2 は約 4,500 万トンと言われていています。この量は日本の CO2 排出量の約 3%に当たるそうです。

こんな現状を知ってもらおうと、私たちは、販売イベントだけでなく、セミナーや SNS を通して情報発信を行っています。大学で行われたオープンキャンパスでは、1 時間ほどのセミナーを開催し、50 名以上の方に参加していただきました。それだけ結果もついてきて、ここ半年で倍近くの「いいね」数をフェイスブックではいただいております。そして、1 投稿に対しての閲覧数は約 2,000 人にもなります。この大村知事と語る会の投稿も、1,937 名の方に見ていただいております。

それでも私たちの力では限界があるために、行政にも力をかしていただけたらと思います。一つ目に、より大きな市場で規格外野菜や私たちの商品を手にとっていただける機会を増やすことです。二つ目に、メディアの告知です。影響力のあるメディアから環境に対する意識改革を行っていくことが大切だと思います。キャッチコピーなんかがあるといいかもしれませんね。

この二つをかなえるべく、私はこんなイベントを提案します。その名も「見た目より味で勝負、ベジグルメフェア」の開催です。環境問題について、食から考えることのできる楽しいイベントです。模擬店を並べ、販売している商品は規格外品、無添加食品も大歓迎します。ステージでは、学生がわかりやすく環境問題をプレゼンテーションします。家庭で余った食品の活用方法が学べる料理教室や、農家直伝おいしい野菜の育て方教室も同時開催し、誰もが楽しめるイベントとなると思います。

ベジーガガは今後も地球に優しい食生活の改革を進めていきたいと思っておりますので、応援どうぞよろしく願いいたします。

以上です。(拍手)

【大村知事】

ありがとうございました。

皆さんは実際に農産物をつくっているというか、生産もやっているんですか。

【後藤】

そうですね、今、長野県飯田市のかたつむりの会という農家の方に協力いただいて、年に一度は農作業を行っています。

【大村知事】

あと、さっきの発表だと、規格外野菜は主にスイーツにするんですか。

【後藤】

やはり女性のメンバーなので、スイーツ、お菓子づくりをしたいということで。

【大村知事】

また後ほど御発言いただきたいと思います。

次は、杉原秀教さん、よろしく願いいたします。

【杉原】

先ほど御紹介にあずかりました中部大学ボランティア・NPOセンターの杉原秀教です。

愛知県青少年会議や愛知県社会福祉協議会の際に、賞状を受けた際に知事のことを同じ会場でお見かけしておりまして、当センターが知事とお会いするのは今回で3回目です。

ちょっとかた苦しい発表になってしまいますが、すみません。それでは、中部大学ボランティア・NPOセンターの発表をさせていただきます。

当センターでは、ご覧の社会福祉、社会教育、国際理解、環境対策、災害対策、地域貢献の六つのプロジェクトがあり、様々な活動をしています。また、ボランティア意識向上のために、これ以外にも様々な活動を行っております。

今回は、子供を対象にした環境活動について紹介させていただきます。

大きく分けるとこの二つがありますが、まずは親子田んぼ体験から紹介させていただきます。

親子田んぼ体験では、地域の親子を対象に、学生と一緒に田植え、稲刈り体験を行っています。これによりお米の成長を肌で感じ、作ることの大変さと食へのありがたみを学んでもらいます。活動場所は、中部大学のすぐ下にある環境水田と畑にて行っております。親子田んぼ体験は、平成18年に開催されており、今年になるまで8年間連続して開催しております。参加人数は、延べ人数で親子が約150名、そのうち子供が80名、学生が約200名参加しました。

続いて、活動の写真をご覧ください。

田植え体験の様子では、親子と学生と一緒に田んぼに入りお米の苗を植えました。稲刈り体験では、学生が付き添って、子供が鎌を使って稲を刈り取りました。収穫祭では、食

に関するクイズの出題やお米の配布をしました。

ご覧のように、田植えから収穫までを通して、泥に入ったときの驚きや収穫したときの感動から感受性を養い、植える、収穫するのサイクルの中で育てる大変さを学び、食のありがたみを感じることができます。

子供自然体験キャンプでは、地域の小学生を対象に1泊2日のキャンプを行っています。自然の中でさまざまな活動をすることで、自然や環境についての興味、関心を持つきっかけを作ります。また、集団生活を通してソーシャルスキルなどの様々な能力を養います。この活動は平成17年から不定期に開催されており、今年で5回目の開催となります。2011年からは連続して当活動を行っております。この活動には41名の小学生が参加しました。

続いて、活動の写真をご覧ください。

フィールドワークでは、自然の中にあふれる生き物や植物を探すために森の中に入り、散策をしました。野外炊飯では、屋外で子供と学生が一緒になってカレーをつくりました。このように自然に囲まれた環境でキャンプを行うことで、動植物や昆虫などを見たり触ったりでき、自然への興味、関心が生まれます。また、子供同士が協力していくことで協調性が養われたり、施設のルール、マナーを守ることで規律性が養われたり、親元を離れることで自立精神が養われます。これらのように自然の中で行うことには意義があると考えます。まず、家庭や授業で普段体験できない自然体験ができます。そして、土に触れたり動植物を見たりすることで五感を通して自然を感じるすることができます。そのときに感じた驚きや感動から、自然への興味、関心を持つきっかけを生み出すことができます。

参加者を増やすために行った工夫は、ご覧のとおりです。学生が直接ポスティングしたり、親子の方がよく目にする場所である大学内の掲示板や公民館などにポスターを張り出したり、親子田んぼ体験の活動の際に子供自然体験キャンプの活動の紹介をするなどを行いました。

そして、参加費が安いということも大きな強みだと思います。当センターの活動は、大学が田畑の管理費、消耗品費、物品費などの支援をしてくれます。そのため、親子田んぼ体験では、年間参加費800円、子供自然体験キャンプでは1泊2日で2,000円です。気軽に参加できる参加費であることも、参加者を増やすことにつながっていると思います。

また、継続して参加してもらうために行った工夫が四つあります。

一つ目は、親御さんとのコミュニケーションです。活動中、子供だけではなく、親御さんにも積極的に話しかけることで親近感がわき、直接要望などをヒアリングする機会にも

なります。これにより口コミで情報が広まり、リピーター獲得にもつながります。

二つ目は、田んぼ新聞や記念写真の郵送です。画面の左側が田んぼ新聞のサンプルで、シーズンを通じてお米の成長を載せています。右側が活動の記念写真の様子です。

三つ目は、アンケートの実施です。イベント時の親御さんのアンケートから、「子供が笑顔になれた」や「理解しやすい作業説明が欲しい」などの感想や要望を踏まえ、反省点、改善点につなげていきます。

四つ目は、説明会や勉強会、反省会の開催です。活動の前後にこれらを行うことで、次のような効果が期待できます。勉強会などを行うことでスタッフの意識向上、安全に配慮した活動、質の高い企画立案、イベントの継承の四つを得ることができます。これらはPDCA サイクルを実現し、より質の高い活動、そしてイベントそのものの継承へとつなげていくことができます。

行政に協力していただきたいことは、まず広報や掲示利用の協力です。そして、耕運機の無償貸し出しや農業経験者の人材派遣です。活動において必要となる物品は大学が支援していただきますが、壊れたり使えなくなったりすることから、消耗品の提供や各費用の補助も協力していただきたいです。また、各種の勉強会や研修会の開催などが挙げられます。

県内の環境活動を盛り上げるためのアイデアは八つあります。

一つ目は、家庭から出る牛乳パックなどのごみを利用したおもちゃや生活に役立つグッズ作製体験です。

二つ目は、小中学生も田畑と触れ合う機会を設ける農業体験を開催することです。

三つ目は、親子を対象に、食材を余すことなく食べられる方法を伝えるエコクッキング教室を行うことです。

四つ目は、畜産や植物を育てている施設や大学へ見学・体験ツアーを行うことです。

五つ目は、例えば赤色や茶色をした古代米を使って田んぼ体験を行うなどの珍しい植物や野菜などの苗を提供することです。

六つ目は、地域ごとにすむ生物の調査を行い、図鑑を作成することです。

七つ目は、活動を主催する人向けに専門的な勉強会や研修会などを開催することです。やはりこういう機会は少ないため、大事だと思います。

八つ目は、今回のように交流会や報告会の場をつくっていただきたいと思います。他大学の報告や活動からいろいろなことを学ぶことができると思います。

最後になりますが、今回、子供を対象にした環境活動をテーマに紹介させていただきましたが、自然体験を通して子供が自然への興味、関心を持つきっかけとなるだけでなく、子供の姿を見て親御さんも自然へとかかわる機会が増え、また学生も親子とともに自然体験を行うことで多くのものを学びます。子供、親御さん、学生の三者に教育効果があり、三者一体となることで自然への知識や今後自然とかかわっていく意義が受け継がれていくと思います。

これで中部大学ボランティア・NPO センターの紹介を終わります。ありがとうございました。(拍手)

【大村知事】

ありがとうございました。

さっきの自然体験キャンプというのは、春日井市の自然の家。田んぼはどこ、その辺ですか。

【杉原】

中部大学の下にすぐ畑があるんですけども、そこを管理している方が場所を提供してくださいまして、そこで田んぼ体験を行っております。

【大村知事】

じゃ、すぐそばということですね。なるほど。わかりました。また後ほど意見をお聞かせいただければと思っております。

続きまして、濱口静加さん、よろしく願いいたします。

【濱口】

御紹介いただきました名城大学ボランティア協議会の濱口です。よろしく願います。

今日は、まず最初に、名城大学ボランティア協議会はどんな団体かということを軽く説明したいと思います。

まず、環境活動を始めとする防犯、災害復興、福祉と、多岐にわたる活動を行っております。活動人数や活動回数を言えば具体的に想像がつかれると思うので、それも説明したいと思います。

3・11 前までだと年平均の活動数は 130 日、約 3 日に 1 日行う回数で、人数は 2,400 人でした。3・11 の後だと、ボランティア意識が高まったのか、年平均の活動数は 35 日増えて 165 日となり、活動人数は 700 人を増えて 3,100 人となりました。現在の在学生の登録者数は 300 人となっていて、中心メンバー約 50 名で活動を行っております。

環境ボランティア部門の一つであるクリーンアップ大作戦という活動について説明します。

これは月2、3回、学生と教職員さんを中心に、大学周辺の清掃活動をしています。お昼休みに行っているのので、比較的参加しやすい活動です。なので、1回に50人程度参加され、周辺地域を清掃しています。また、左の写真のような派手なゼッケン、黄色い蛍光色のゼッケンをつけることで、PR活動にもなります。

この活動でやっていることは、Vポイント制度というものです。これは活動に参加するごとにポイントが押してもらえて、過去このようなカードをつくっていました。こんな感じですよ。ポイントをどんどん押してもらおうと、ドリンクや丼物や定食とか、名城大学で一番高いリッチなランチも受けることができ、これ目的で参加される方も少なくありません。

次は、エコキャップ大作戦について説明します。これは2カ月に一度、学内で集めたペットボトルを分別する活動です。去年までは学内のごみ箱の約40カ所にこの箱を置いてペットボトルとエコキャップと分別していたんですけど、今年は50個に増やしました。去年は16万個集めることができ、今年は今の時点でもう20万個、去年を4万個上回る個数を集めています。来年度からは、24時間テレビで行われたキャップアートもやったりして、周知活動、広報活動をしていきたいと思っています。

次が、ごみ分別特別巡回パトロールです。天白環境事業所の方々に朝早くから、7時半から8時半、約1時間かけて大学周辺のごみ設置場所を説明していただきます。駅周辺は大学生が多く住んでいるんですけど、モラルが問われるなというのを活動を通して思いました。プラスチックだったり紙だったり、資源として分けられるものも全て可燃のごみ袋に入れていました。あとは、可燃袋とか指定されたごみ袋じゃなくて、袋にただ入れてごみステーションに出すという最悪な状況もあって、考えさせられる活動となりました。

次は、省エネパトロールです。これは電気のつけっ放しとか暖房のつけっ放し、そういうのを節電するために行う活動です。12月にもまたこの活動が行われるんですけど、暖房をオフにしないと電力がという活動です。

次は、打ち水大作戦です。これは7月の中旬に行われた活動で、水と水曜日とにちなんで7月10日と17日の2日間に分けて行われました。教職員さんと学生を中心に約150名参加し、雑用水を使って打ち水をしました。8時半の時点で32.6度あったんですけど、打ち水をした結果、15分後には31.1度、約-1.5度低下しました。目標の-2度には届かな

かったんですけど、風が吹いてすがすがしい朝の気持ちになりました。

次は、キャンドルナイトについて説明します。これは今年で3回目になるんですけど、今年も3・11の追悼とエコ意識向上のために行いました。中日新聞さんにも取り上げていただきました。思いはやっぱりECOとLIFE、命HOPE、願いを込めて、絆を中心としてハートでつくりました。

現在、ボランティア協議会ではホームページやフェイスブック、アメーバ等、広報活動に力を入れています。また、新入生オリエンテーションなどで登録用紙に記入していただき会員になるという仕組みもつくっています。また、活動に参加してくれた人には積極的に話しかけたりして、友達づてに口コミとかいろいろしています。

参加者を増やすために行政にしてほしいことは、若者と行政だったり、若者同士が交流する場を設けてほしいなというのが一番です。ボランティア協議会は来年で10周年になり確立もされてきたので、あとは交流してどんどん新しい情報が欲しいなという思いです。県内の活動を盛り上げるためには、先ほど話したVポイント制度のように、ポイントをためる形式の環境活動が一番市民の方も参加されやすいのではないかと思います。

以上で終わります。ありがとうございました。(拍手)

【大村知事】

ありがとうございました。

あのキャンドルナイトは3・11にやるんですか。

【濱口】

10月31日に、大学祭と一緒に。それだと来場者数も多いので。大学祭の1日目に行いました。

【大村知事】

また後ほど意見をしっかりお願いいたします。

それでは、続きまして古田千佳さん、お願いいたします。

【古田】

金城学院大学 KSC の古田千佳と申します。本日は、このようなすてきな機会にお招きいただきありがとうございます。

今から、私たち KSC について少しお話しさせていただきたいと思います。

KSC は、金城・里山・コンサベーションの略です。この名前にあるように、金城の里山を保全、保護していこうという活動を私たちは行っています。

まず、皆さん、金城学院大学と聞いて、どんな大学かと思いますか。私は、金城学院大学について知る前、高校生か中学生のころは、こういった感じのすてきな町のところに建っているのかなと思っていました。ですが、実際は、上から地図を見てみるとこのような感じで、緑ばかりなんです。緑ばかりの中の星のところに金城学院大学はあるんですが、もっとズームして見るとこんな感じです。まさに山の中にキャンパスが建っているという、そんな大学です。私たちの金城学院大学を中から見てみると、建物が自然の中にあるという感じで、共存した大学になっています。

右の写真にある桜ですけれども、これは自分たちで植えたわけではなくて、自然に生えたものがこのようなすてきな桜になっています。この桜は学生からも大人気で、春になるとすごくきれいなので、この前でお弁当を食べたりおやつを食べたりしてお花見をする学生がたくさんいます。

他にも、先ほどのキャンパスを少し離れた、隣に八竜湿地というものがあって、こちらはすごくいい環境の湿地でして、珍しい植物などもあつたりします。こういった感じで金城はたくさん自然に囲まれています。

この金城の里山は、先ほど御紹介した八竜湿地には希少価値の高い植物のトウカイコモウセンゴケですとかマメナシといった珍しい植物も生えています。そして、金城の里山にはキツネがいることがこの間発覚しました。キツネは草原や林にすんでいる動物ですけれども、私たちのこの里山活動が、キツネがあらわれるという形で少し成果が見えてきたのかなと思っています。

実際に、私たちは池の生態調査なども行っています。金城の学生は普段ワンピースとかスカートを着たりしているんですけれども、このときは長靴を履いて、防水加工のあるズボンをはいて、じゃぶじゃぶと池の中に入って、網を持って中にいる生物をすくって生態調査を行ったりしました。また、山の中に入って行って、山の木の間伐を行ったりとか巻き枯らしを行いました。これは、山にどんどん木が生えてきちゃうんですけれども、生えっ放しにしているとどんどん暗い森になって行って、常緑樹しかない暗い森になってしまうので、私たちはこういった間伐などを行って明るい森にして、たくさんの植物が生えるいい里山にしていこうと活動しています。

他にも、ちょっとおもしろいイベントとして、プロのカメラマンによる写真撮影講座なども行いました。こういった感じで、今の大学生、カメラが皆さん好きですよ。なので、こういった写真撮影講座を行って、里山の中を散歩していい写真を撮ろうというイベント

なども行いました。また、他にも、先ほど御紹介した間伐を行った際に出た竹などで炭焼きを行ったりしています。でき上がった炭はオープンキャンパスや学祭などで配布して、皆さんのお家で役立ててもらおうと活動しています。他にも、山のごみ拾いなども行っています。

私たちの活動を広めるためにも、いろいろな活動を行ってきました。

こちらの金城里山マップというものを作成して、私たちの里山にはこういう植物がありますよという紹介のマップをつくりました。こちらは、先ほどの竹炭をお配りする際ですとか、あとは大学祭やオープンキャンパスなどでもお配りしています。また、新入生歓迎会などでこういった活動をしている団体があるということをお声がけしています。そして、大学祭やオープンキャンパスで展示や体験ブースを設けています。大学祭の様子の写真が右下にあるんですけども、たくさん小さいお子様が来てくださって、皆さん、まつぼっくりツリーをつくったり、竹とんぼをつくったりとか、私たちの里山にあるものを活用して工作を行っていただきます。他にも、KSC以外の方も参加できるようなイベントを行ったりしています。

私たち KSC はこれからもこういった活動を通して皆さんに里山について知ってもらって、もっと里山をより良くしていくために活動を続けていく予定です。

今回このような機会をいただいたので、愛知県の方にやっていただけるとうれしいこととしましては、大規模な情報発信をしていただけるととてもうれしいなと思います。私たち大学生はやはり行動範囲が限られてしまうので、なかなか広い情報発信が難しいところが課題だと思っています。なので、自然のおもしろさ、よさに加えて、自分が環境活動に参加したらどうなるか、またその場所の環境がどうなっていったら、将来どのようなすてきな場所になって自分にどう返ってくるのかまで伝えていただけると、すごく魅力も伝わって、より環境活動に参加したいなという気持ちが生まれてくるのではないかなと思います。

また、この機会にやりたいこととしましては、森コン、山コンという、ちょっと面白い学生が気になるような名前をつけて、いろいろな大学や学生さんと一緒に活動していくことができるとと思います。

若い世代にアピールすることはすごく大事ななと思っていて、皆さんほかの団体さんも親子のイベントを開かれていたり、お子さんに向けてのイベントを開かれていると思うんですけども、私たちの世代は次に親になる世代だと思うので、次の親の世代に伝えることによって、親から子供へ環境活動おもしろいんだよ、これ参加してみる、というふう

声をかけていただいて、どんどん下の世代に伝わっていくと思うので、今後環境をより良くしていくため、持続していくためにも、若い人に向けての広報活動は必要なのかなと思っています。

以上で私の話は終わります。ありがとうございました。(拍手)

【大村知事】

ありがとうございました。

じゃぶじゃぶと入った池は、あれもキャンパスにあるんですか。

【古田】

そうですね、キャンパス内に池があって。いろいろな場所がキャンパス内にあるんですけれども。

【大村知事】

そこは結構魚とか生物がいるんですか。

【古田】

いっぱいいて。意外な生物も出てきたりして、驚きでした。

【大村知事】

また後ほど御意見いただきたいと思います。

それでは、今日の参加7人の最後になりました。お待たせいたしました。水野陽介さん、お願いいたします。

【水野】

初めまして。先ほど御紹介にあずかりました名古屋大学3年で、「We Chubu」の水野陽介と申します。今日はよろしくお願ひします。

私たち We Chubu は、昨年8月に結成された、持続可能な社会を考えるサークルです。私たちが中部をつなげるという意味が名前には込められており、県内や県外から様々な大学生が集まって活動しております。

私たちの団体は、愛知県の新しい公共支援事業、新しい公共の場づくりのためのモデル事業の一つとして、愛知県自然環境課や環境省中部環境パートナーシップオフィス、特定非営利法人ボランタリーネイバーズなどの御支援をいただいて活動しております。

8月に結成されて以来、持続可能な社会にするために解決すべき問題を議論し、その中から森林問題やライフスタイルなどのテーマを設定しました。森林問題のチームでは、森林の現場や愛知県が主催している里山と生物多様性の講座に参加したり、間伐がしっかり

行われており持続可能な林業が行われている現場を見学するなどのインプットを行いました。そして、インプットをもとに、社会人の皆さんからのアドバイスをいただきながら、学生が考える持続可能な社会にするための提案を議論し、その発表の場として今年2月にフォーラムを開催しました。

フォーラムでは知事にも御挨拶をいただき、「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーのマネジメントを読んだら」の著者である岩崎夏海氏をゲストに迎え、「もし今ドラッカーが大学生だったら持続可能な明日をどうつくるか」というテーマで講演していただきました。

この活動を通して、私たちは、時間をかけて話し合い、決めることでお互いに納得できる結果を得られることや、普段かかわらないような人たちと活動することで新しい発見があることを知りました。

私たちの提案をどう伝えるのかを考えるのはとても難しいものでした。というのも、同じ大学生といっても、テレビをよく見る人、全く見ない人、SNSをよく使う人、ネットを使わない人など、生活スタイルは十人十色で、どのような媒体でどのように成果を発表すれば同じ大学生に思いが届くのかというのは非常に悩みどころでした。最終的には、このような冊子をつくることで大学生に自分たちの提案を伝えました。

本年度の活動については、自然環境にテーマを絞った上で活動しております。豊田市の棚田で春に田植え体験や生き物観察会、秋に稲刈り体験をさせていただきました。写真は、稲刈り体験のときの様子です。愛知県にも棚田が残っていること、その棚田を管理することはとても大変だということ、棚田が生物多様性に重要な役割を担っていることなどを、この活動を通して学びました。

その他にも、環境デーなごやや東山動物園で行われた生物多様性の重要性を折り紙を通して子供に伝える「おりがみアクション」でボランティアをしたり、愛知学院大学の里山保全活動に参加させていただいたりしております。

これらの活動で学んだことや、それぞれの生活で感じた環境に関することなどを、名古屋市内に月1回配布される中日新聞の環境情報誌「Risa」にコーナーをいただき、4月よりメンバー交代で連載しております。これは10月の記事で、集中豪雨の時にどのように感じたかをコラムにしております。

現在は参加者が少ないので、参加者を増やすために他の団体の活動に参加させてもらったり、愛知淑徳大学で説明会を開いたりと活動しております。

昨年の結成時には、愛知県のつながりのある大学教員を通じてメンバーを勧誘していただきました。行政が支援している団体は、参加するときも安心できますし、これからも行政には学生団体への支援をお願いしたいと思っております。

私たちが活動していて感じたのは、環境活動に興味はあるけれど、実際に参加してみようと思う学生が少ないということです。私自身は、昨年度に愛知県自然環境課で2週間のインターンシップをさせていただき、そこでこの活動を勧められたのが参加のきっかけでした。しかし、普通の学生にとって、自分から進んで全く知らない団体に加入しようというのはハードルが高いし、複数の大学にまたがるサークルの情報は得られる機会が少ないと思います。

私自身がインターンシップで行政や企業、NPO と協力して生物多様性の保全に関する施策を行っていることを知り、行政が様々な団体をつなげる役割があると感じました。そこで、行政には、行政の持っているつながりや情報を生かして、個人と団体、団体同士をつなげたり、ホームページ等で情報を分かりやすく整理して発信する役割を担っていただきたいと思っております。

また、活動の一つとして、私は We Chubu でお世話になった環境省中部環境パートナーシップオフィス、略して「EPO 中部」でアルバイトをしており、ESD に関する仕事にもかかわっております。普段はオフィスワークが多いのですが、9月に栄で行われた「あいち・なごやESD フェスタ」や「藤前干潟ふれあいデー」のイベントでは、ESD のブース出展を手伝いました。

環境イベントの来場者はもともと関心がある人が多いように感じており、県内の環境活動やESD への機運を盛り上げるためには、全く環境やESD に興味がない人にどうアプローチするかが課題だと思っております。その際には、直接的に環境をテーマにするのではなく、格好いいやかわいいといった感覚や ap bank のような音楽などから、環境活動以外の別のものから環境活動につながるようなPR をするのがよいのかなと思っております。

EPO 中部やボランティアでは、行政や民間企業やNPO の方とたくさんお会いするチャンスがあるので、今後はそのつながりを生かして社会に貢献できるような活動をしていきたいと考えております。

以上です。ありがとうございます。(拍手)

【大村知事】

ありがとうございました。

先ほどの棚田というのは、豊田のどの辺になりますかね。

【水野】

豊田の松平地区です。

【大村知事】

愛知県もあちらの三河山間部には結構棚田がたくさんありますから、ああいったものを大事にしていきたいなと思います。

ありがとうございました。

それでは、一回り皆さんに御意見をいただきました。これからフリートーキングということでもありますけれども、先ほどの発言で何か言い足りなかったこととか、つけ加えることとか、これだけは言っておきたいとか、また誰かにこういう話を聞きたいとかいうのがありましたら、どなたからでも結構ですので、よろしく願いいたします。いかがですか。

川口さん。

【川口】

先ほど、山の中に車椅子の人が入っていくことがありましたが、一般的な人から見るとやっぱり危険なことなんじゃないかと思うかもしれません。しかし、あいち森と緑づくり税を使って整備していただくときに、あえて完璧にバリアフリーとかユニバーサルデザインにすることはお願いしなかったです。それは、障害のある方も完璧に整備されたところを通るのが全てではなく、何でもかんでもユニバーサルデザインやバリアフリーにすることが100点ではないと思い、そうしました。そのままの森にあるバリアを私たちと一緒に乗り越えることがその人の楽しみであり、私たちの楽しみにもつながる。そして、それが絆じゃないかなと思い、そうしています。

むしろ、さっき中部大学の方のお話にもありましたが、子供たちはそのバリアが楽しいわけで、アスレチックや滑り台などのバリアがあるほうがやっぱり子供たちも楽しいし、私たちでも全部整備されたのが楽しいというわけじゃないと思います。福祉を学ぶ私たちから見て、福祉と環境活動というのはなかなかイメージしにくいと思うんですが、福祉を学ぶ私たちが環境活動に取り組むということはそういうことなんだと知ってもらいたいです。

以上です。

【大村知事】

車椅子の方を里山に入れると、車椅子では動けないから誰かおぶっていくわけですか。

【川口】

おぶったり、みんなで車椅子を抱えて持ったり。それができないなら、車椅子をアウトドア用の自転車のタイヤに変えたりなど、その開発もできたらなと思っています。

【大村知事】

ありがとうございました。

杉原さん、どうぞ。

【杉原】

今、きのこクラブさんが、遊歩道とかですかね、バリアフリーとかなしでそのままの森を乗り越えてもらうと言われました。中部大学の NPO センターも六つのプロジェクトに分かれていまして、社会福祉という活動のリーダーの方といろいろと話したことがあったんですけれども、障害を持った方とか高齢者の方には心のバリアフリーということが大事で、障害者だから特別視するということは心がけないようにしているんですが、森の中を散策するとなったときに、きのこクラブさんからの意見的にはそのままの森を乗り越えてもらいたいとおっしゃっていたんですけれども、実際に参加した障害者の方とか高齢者の方からの意見的にはどうなんでしょうか。森はバリアフリーがないほうが楽しかったとか、そういう声とかはいただけたんでしょうか。

【川口】

味覚狩りツアーの写真にも載っていたように、車椅子の方が参加されて、すごい楽しんでらっしゃるように私たちは思いました。ミカン狩りをさせていただいたときには、地元農家の方に、決まったところでとるはずだったんですが、ミカン畑は斜面なので、車椅子の方がいるということで下のところを、車椅子でも入れるようなところにしていただいたりという御厚意をいただいて、車椅子の方にもすごい楽しんでらっしゃっていました。

【大村知事】

そのままの自然を体験できるというのが楽しいということですかね。

【川口】

そうですね。

【杉原】

ありがとうございました。

【大村知事】

他にいかがですか。

古田さん、どうぞ。

【古田】

質問が集中してしまって申し訳ないですが、きのこクラブさんに一つ質問させていただきたいことがあるんですけども。

フェイスブックに情報発信をされていると伺ったんですけども、私たちの活動は学内でも知られることがなかなかなくて。新入生歓迎会とか学祭でも展示ブースを置いたりして発信しているんですけども、なかなか全ての学生に知っていただくことが難しくて。どういった情報発信をされていて、どういった結果が出ているのか、もしよければ教えていただけるとうれしいです。

【川口】

きのこクラブはまだ発足間もないですが、フェイスブックもしています。口コミで自分の友達にまず言って、その子が参加して楽しければ、その子がまた友達に言ってだんだん輪が広がっていく感じにさせていただくと、また入りたい子がいたよ、とか言ってくれたりするので、自分の言葉で言うことが一番いいのかなと思います。

【古田】

伝わりやすさというか、やっぱりそこは食の活動を通して興味を持ってくださった方が多い感じですか。

【川口】

環境活動というとやっぱり固いイメージを持ちちゃうので、食だったらなじみやすいし、今日何々食べれるから来てねとか言うだけで、食べるだけでもいいから来て、ということにつながったりすると思います。

【古田】

うちの大学でもタケノコがとれたりとか椎の実がとれるので、ぜひベジーガガさんにも教えていただきながらやれたらうれしいなと思います。

ありがとうございます。

【大村知事】

他にいかがですか。

後藤さん、どうぞ。

【後藤】

情報発信という言葉が出て。すばらしい活動をされている団体さんばかりでしたが、ど

の団体さんも抱えている悩みというのは、情報発信していることとかよりも、多くの人に知ってもらいたいという思いが強いことを感じました。

愛知県民が環境活動に対してこれだけ頑張っているということ、愛知県から全国的にもう少しアピールできたらなと思いました。例えば、愛知県のホームページに環境活動に取り組む団体のリンクを張っていただいたりして、もっと県民に寄り添ったホームページに変えていっていただくのも一つの手かなと感じました。

【大村知事】

ありがとうございます。

杉原さん、どうぞ。

【杉原】

今の流れからちょっと変わってしまうんですが、皆さんにお聞きします。各大学でそれぞれ活動を行っていると思うんですが、それぞれの活動で登録している人数は何人ぐらいですか。きのこクラブさんから教えてもらえたらありがたいんですが。

【川口】

きのこクラブは今年できたばかりでまだ少ないですが、20人ぐらいです。まだ少ない。これから増えると思います。

【川村】

私たち、命をつなぐPROJECTも20人ぐらいです。

【後藤】

私たちベジーガガは先輩たちから受け継がれているので、今活動しているメンバーは10名ほどですが、1代目の先輩が5名、2代目の先輩も5名、3代目の先輩が8名いました。私たち3年生が5人と2年生が5人で活動しています。

【濱口】

ボランティア協議会は、登録者数は300名ですけど、中心的に活動しているのは50名です。大体1学年15人です。

【古田】

私たちKSCは、先生も一緒に活動しているので、先生、学生を含め20名ほどです。

【水野】

私たちは、4年生とかが多い関係もありまして、6人ぐらいで活動しております。

【大村知事】

杉原さんのところほどのくらい。

【杉原】

僕たちは360人登録させていただいています。人数を聞くと多いなと思うかもしれないですけども、僕たちはボランティアを行っているということで、どうしても活動に対しては強制的に参加させることはしにくいんですよ。

その場合に、口コミで呼びかけとかをしたりするんですけども、どうしても360人いる中で半分ぐらいか100人ぐらいは幽霊部員という形になって参加できないというところもあるので、もしよろしければ皆さんから意見が欲しいんですけども、みんなが参加しやすい環境づくりのために大切にしていることとかあればお聞きしたいんですが、どこかありましたら。

【大村知事】

360人全員が活動するのはそう簡単にはいかないと思いますけれども、そのうちの半分でも実際に熱心に活動するのはすごい人数だと思いますがね。100人超えるって、そう簡単じゃないと思いますけど。

いかがですか、今の参加しやすいようにするためにどういった形のものがあるかというのは。もし何か御意見があれば。

【濱口】

私たちも同じ悩みがあって、300人だけど50人だから。中部大学さんはすごいなと思ったんですけど、100名以上参加というの。1回のイベントすごく大変じゃないですか、まとめるのが。そういうところを私は逆に教えてほしいなと思います。

【大村知事】

工夫とかいろいろありますか。

【杉原】

先ほどスライドで紹介させていただいたんですけども、活動を行う前、活動を行った後に勉強会、さらに活動を行った後に反省会、そしてさらにそこから改善点を出してみんな考え合う場をつくるんですけども、その際に同じ学年の子たちで協力してやるのではなくて、上の学年、下の学年、先輩から後輩に受け継いで勉強会で話してもらったり、当日の活動で様々な役割を与えることでそれぞれに責任感を持ってもらって、その中でみんな励まし合って活動しているので、そういったところが人数が多く参加できる理由じゃないのかなというのがあります。

あとは、大学がいろいろと支援してくださるところもありまして。やっぱり新入生歓迎会の際に活動紹介を行っているところも、他の大学でもありましたけれども、こちらの大学でもそういう面がありまして、新入生歓迎会の際に時間をいただいて、その際に紹介させていただくというのがありますし、基本的に大学側が結構参加費の負担をしてくださいますので、学生みんなが参加しやすい場であるということが大きな強みじゃないのかなというのがあります。

【大村知事】

大学が費用を一部持ってくれば、それはやっぱり大きいでしょうね。

濱口さんのところはあれですか、50人でも結構な人数だと思いますが。結構大変でしょ、連絡して集めるだけでも。

【濱口】

メール配信みたいな感じで、防犯だったら防犯の代表が、福祉だったら福祉の代表が、いついつ場所はここで何時から行きますという連絡を配信して、配信された活動を見て、私この時間行けるから行くという形になっています。だから、土日とかじゃなくて、3、4限の空きコマでやったりとか。空きコマに基本私たちは行っていて、土曜日とかは余りないです。イベントとかは参加できるんですけど、常時活動としては、環境もそうですけど、昼休みだったり、空きコマでやっています。

【大村知事】

この中で、大学をまたがってやっているところは。

[挙 手]

同じ大学だと連絡とか活動の場所もね、大学を拠点にということになるとは思いますけど、複数の大学を横断でやっているのは結構大変だと思いますけれども、そういう御苦労というのは、工夫とかありますか。

川村さん、いかがですか。

【川村】

私たちは会議を2日に分けてやっているんですけど、大同生が多いので、大同の近くの事務所で水曜日は会議を行って、外の大学の子たちはまた違う名古屋市内に近いところに会場を借りて会議を行っています。

【大村知事】

そういう工夫で連絡しているわけですね。

杉原さんのところはどうですか。

【杉原】

僕たちは、ちょっと勘違いしちゃったんですけども、他の大学との連携ではなくて、外部の団体の方との連携のほうでして。

外部の方との連携となりますと、どうしても向こうの方の予定に合わせて参加しないといけないというのもありまして、結構僕たちもそこで問題がありまして。後でちょっと質問させていただこうと思っていたんですけども、もし後でお時間があれば、We Chubuさんなんか、大学でいろいろと、他の大学の方と結構接点を持っているところがあるみたいですけども、そのときに心がけていることとかがあればお聞きしたいと思っております。

【大村知事】

水野さん、どうぞ。

【水野】

僕たちは、名大は僕1人で、あとは中京とか南山とか三重大学と愛知淑徳大学にメンバーが分かれているので、会って話すというのはお互いの予定を合わせるのがすごく難しいので、専らフェイスブックとかラインのグループで連絡を取り合っております。特に毎週この日に集まってとかいうことは決めていないですけど、話し合うことがあったら適宜会ったり、話し合いもラインで済ませちゃってるのが現状です。

【大村知事】

それだけばらけていると、一遍に集まるのだけでも大変だね。今はフェイスブックやライン、そういうので連絡とれますもんね。そういうのは昔と全然違う。昔は一生懸命電話をかけまくって、それも固定電話だからつながらないことが多かったけれども。

ありがとうございました。

他にいかがですか、いろいろな御意見があれば、この際いただければと思います。

杉原さん、どうぞ。

【杉原】

先ほどちょっとお話ししたんですけども、外部の方とつながる、大同大学の命をつなぐPROJECTですと、野球選手とかアーティストの方を広告に載せているというのもありましたし、We Chubuの方はいろいろな他団体の方と協力してやっているというのがあったんですけども、他団体や他の人たちとかかわる際のきっかけ、どうやってこの人た

ちと知り合ったかを教えていただきたいんですけども。

【大村知事】

外部の方との連携とかを具体的にやっておられる方から少し発言いただきたいと思いますが、川村さんいかがですか。

【川村】

私たちは、学生がこういう人に取材したいというのを NPO 法人さんに言ってアイデアを出して、NPO 法人さんが計画を立ててくれる感じです。

【大村知事】

その NPO 法人というのは皆さんでつくったんですか。

【川村】

NPO 法人さんは会社というか。

【大村知事】

知多の会社、いわゆる臨海の企業さんではなくて。

【川村】

はい。

【大村知事】

ecoReco というフリーペーパーをつくっている NPO でしたか。

【川村】

はい、そうです。

【大村知事】

皆さんからそちらのほうに言って、そちらから当たってもらうというか連絡をとってもらうという感じなんですね。

【川村】

はい。

【大村知事】

水野さん、いかがですか。

【水野】

外部の団体の連携というのは、行政とか支援していただいている NPO の方の紹介もありますし、僕たちのほうから、こういう人に会いたいみたいなことを希望すると紹介していただけたりして。でも、紹介していただいた後は、自分たちで連絡をとったりして外部

の方とのつながりを深めております。

Risa の記事のときも、フォーラムが終わった後に「今年の4月からこういうコーナーをやるけどどうですか」という打診がありまして、お受けすることになったので、きっかけは支援していただいている社会人の方々ですけど、深めていくのは学生という感じで活動しております。

【大村知事】

ありがとうございました。

他にいかがですか、いろいろな御意見がもしあれば。

古田さん、どうぞ。

【古田】

ベジーガガさんがお菓子などを作られて販売されているということだったんですけども、販売した売上などはどうされているんですか。次の商品開発などに活かされたりしているんですか。

【後藤】

そうですね、販売から出た利益は全て活動費に充てています。私たち活動しているメンバーには一円も出ないボランティア活動になります。あと、販売するイベントは、愛知県内ですが、そういった交通費などは実費で出しているんです。

【古田】

私たちも女子大なので、みんな食べることとかスイーツ大好きなので、すごく興味のある活動だなと思って聞かせていただきました。

ありがとうございました。

【大村知事】

ベジーガガさん、長野県の飯田の農家、そちらへはちょこちょこ行かれるんですか。

【後藤】

飯田市の農家の方に車を出していただけることもあるんですが、無理なときは私たちが行くことになります。

【大村知事】

自分で行かないかんでしょう。

【後藤】

そうですね。それもあるので、よかったら愛知県内で農家を紹介していただければと思

います。

【大村知事】

探せばいっぱいあると思いますよ。

【後藤】

愛知県で、地産地消で活動の幅を広げていきたいと思っております。

【大村知事】

結構遠いなどと思ってね、最初聞いたとき。そりゃ近場のほうがいいわね。

それは県のほうからも少しちょっとリサーチかけてもいいかなと思いますけど。

【古田】

今の知事のお話から思ったんですけども、先ほどの規格外の野菜ですけども、もし売っていただける農家さんとかが見つかったら、私たちの生協とかに売っていただけたらすごくいいんじゃないかなと思いました。規格外の商品の行き先がなくなるということもなく、少し少なくなるでしょうし、私たちの生協としても、直接農家さんからお顔を見て売っていただけるということでしたらすごく安心かなと思うので、そういう機会があればすごくうれしいなと思いました。

【大村知事】

そのこともまたリサーチかけておきましょう。

いろいろな意見を活発にいただきまして、ありがとうございます。

他にいかがですか。

杉原さん、どうぞ。

【杉原】

名城大学ボランティアで、エコキャップ回収を行っていると言っていましたが、僕たちもプロジェクトの六つのうちの一つ、国際理解プロジェクトでもエコキャップ回収というのを行っています。ワクチン支援活動のためにエコキャップを回収して、その分をワクチン支援に回しているんですが、先ほどのエコキャップのほうで、特に来年からはキャップアートをやるとおっしゃっていたんですけども、今まではそういう方向はどちらのほうに。

【濱口】

今まではずっとワクチンでやっていました。16万個去年集まって、約200人分になりました。今年は20万個に今なっているので。キャップアートにするといっても、キャッ

プアートでみんなに見てもらった後は、再利用でエコキャップとしてまた使えるので、加工はしないつもりです。デザインとして広報して、かつまたワクチンとしても使えるようにしています。

【大村知事】

エコキャップは、今まで大体ワクチンのために一生懸命回収していると。
杉原さんのところもそうですか。

【杉原】

そうです。

【大村知事】

エコキャップアートって、今年の8月の24時間テレビでね。僕もテレビ塔の下にキャップを持ってって、その後、皆さんでエコキャップアートをオアシスでやっていたけど。作って見てもらって、回収してまたワクチンに回せばいいのかなと思いますけどね。だから、できるだけ楽しんでやるという試みの一つなんでしょうね。

【濱口】

ただキャップについているシールをはがすとか、汚いのを分別する、規格外、規格内を分ける活動だと楽しくないかなと。楽しいというか、もっと楽しくなるように考えたのがキャップアートで、もとの考えは同じです。

【水野】

古田さんにお聞きしたいんですけど、里山の保全活動ということでいろいろやっていたらと思うんですけど、里山がキャンパス内にある大学は愛知県内にもっとあると思うんですけど、そういう団体と交流したりとかはあるんですか。

【古田】

今のところ機会がなくて、なかなかすることができなくて。私自身も、他の団体さんと情報交換をしながらですとか、やり方の手段の情報交換もしながらできると、もっともっと効率もよく、お互いの里山をより良くしていけるのかなと思っているんですけど、そういう機会がないので。今回、福祉大学さんも里山の活動をされているということだったので、そのあたりもまたつながりを持たれたらなと思っています。

【大村知事】

他にいかがですか。よろしいですか。

大分時間も過ぎてまいりましたので、そろそろまとめにということですが、特にまとめ

るといふことはありませんで、今日参加していただいた体験、経験を持ち帰って、それぞれにまた活かしていただければと思いますし、こうして7人の方がね、それぞれのグループに今日も来ていただいていますので、これを機会にいろいろ交流していただくと非常にありがたいなど。ちょうど皆さんほとんど同世代なので、活発に交流していただくと、より活動が広がっていくのではないかと思います。そんなことをぜひお願いしたいと思います。

それでは、まだまだ発言していただいて結構ですが、とりあえず最後にもう一言ずつ、川口さんから順に今日の感想とかまとめ、これだけは最後に言っておきたいといったことがあれば、ぜひよろしくお願ひいたします。

川口さんから順番にお願いします。

【川口】

きのこクラブはやっぱり間もないサークル活動ということで、今日は本当に貴重な御意見をいただきました。持ち帰って、ちゃんときのこクラブのものにしていきたいと思います。そして、先ほども言っているように、誰もが楽しめる環境活動をしていくことを愛知県で取り組んでいきたいなととても思いました。

ありがとうございました。

【大村知事】

私から一つだけ質問したいと思う。

単純なあれですけど、キノコって毒キノコもあるわけだ。素人でとって大丈夫かなと一瞬思ったけど。あれ結構見分けがつかないのがあるからね。そういうのはどうするんですか、大丈夫ですか。

【川口】

これから勉強します。

【大村知事】

あたらないようにしてちょうだいよ。

ありがとうございました。

それでは、川村さん、どうぞ。

【川村】

今日は本当にありがとうございます。

すごい緊張してうまくしゃべれなかったんですけど、一つ、良かったらこのフリーペー

パーをみんなに紹介してほしいなと思って。こういうのがあるからちょっと見て、ということ伝えてほしいなと思いました。

【大村知事】

そのフリーペーパーは4巻目と、一番最近はいつごろ出したんですか。

【川村】

先月です。

【大村知事】

それはまだたくさんあるということですか。その先月出したのを皆さんに、今日もたくさん持ってこられていますか。

【川村】

はい。

【大村知事】

じゃ、持ち帰ってもらえばいいんだ。ということで、帰りにしっかり持ち帰って、大いにPRしていただけたらありがたいと思います。

また知多半島、皆さん近いからね、ちょうど名古屋から東海、知多市に行く臨海工業地帯の森のベルトみたいなところですよ。ぜひ連絡をとって皆さんも行っていただけたらと思いますので、よろしく願いいたします。

後藤さん、どうぞ。

【後藤】

本日は、このような機会をいただき、ありがとうございました。

環境面で持続可能な社会を変えるということで、私たちは農地すら持っていないですが、農家から販売までを担う活動を行っていますので、このような機会で私たちの活動を知っていただいたということは大きな御縁だと思いますので、この御縁をたくさんの人につないでいただけたらと思います。フェイスブックページでも、ベジーガガで検索していただきましたらすぐ出てきますので、応援よろしく願いいたします。

ありがとうございました。

【大村知事】

ありがとうございます。またこれからもよろしく願いいたします。

それでは、杉原さん、どうぞ。

【杉原】

今回はこのような場にお招きいただき、ありがとうございました。

いろいろな大学の意見を聞いて、多くのことを学ぶことができました。そして、僕たちと同じような活動をして様々な他の成果を得られているというところも知ったので、例えば先ほどの名城大学のエコカップの新しい、楽しめるような取り組みとか、そういうところをいろいろと学びましたので、今後僕たちの方でも活かしていきたいと思います。

そして、せっかく大学の方々と交流ができたので、これからはもしかすると来年、再来年交流が増えるかもしれないと思っているので、よろしくお願いします。今日はあそこに後輩たちがたくさん来ているので、もしかすると皆さんの後輩と僕たちの後輩が連携して何か一つの活動に取り組むことになると思うので、そのときはよろしくお願いします。

【大村知事】

ありがとうございました。またぜひ連絡して交流していただけたらと思いますので、よろしくお願いします。

それでは、濱口さん、よろしくどうぞ。

【濱口】

今日はこのような機会をいただき、ありがとうございました。

中部大学さんの説明会、勉強会、反省会というのは、すごく私たちにとっていい案だなと思ったので、これを機に、持ち帰ってみんなで考えてやっていきたいと思います。

参加者を増やすためにこれからも頑張っていきますので、フェイスブック等よろしくお願いします。ありがとうございました。

【大村知事】

ありがとうございました。これからはぜひぜひよろしくお願いしますと思います。

それでは、古田さん、どうぞ。

【古田】

今回はこのようなすてきな機会をありがとうございました。

皆さんとたくさん意見を交換することができて、私自身もいろいろなものを吸収できたなと思っています。せっかくの機会なので、皆さんでつながって、この七つの大学で連携することができたらなと思います。

私たちの大学は、先ほど御指摘いただいたように、他の大学さんですとかそういう連携がまだまだ難しい、足りない部分だと思っています。なので、ぜひこの場所から進めていきたいと思っています。

本日はありがとうございました。

【大村知事】

ありがとうございます。またこれからもよろしく願いいたします。

それでは、水野さん、よろしくどうぞ。

【水野】

本日はありがとうございました。

こういう場で他の学生の団体の活動を聞いたり、学んだりして、今日だけでいろいろなつながりができたと思うので、来年の ESD 会議に向けてもこの学生団体同士のつながりをもっと強化して、できることならその会議の場で何かやってみたいなど今日思いました。

We Chubu は結構ゆるい活動をしていて、掛け持ちも歓迎しているので、皆さんメンバー募集中でございます。学生団体同士がつながる場としても、We Chubu を盛り上げていきたいと思っております。

ありがとうございます。

【大村知事】

ありがとうございました。

まだまだ皆さん発言したいかもしれませんが、そろそろ時間がまいりましたので、こんな感じにしたいと思います。

それでは、私が最後、皆さんにメッセージも含めて申し上げたいと思います。

まずは、今日はこういう形で皆さんに参加していただきまして、本当にありがとうございました。大学生の皆さん、若い皆さんのいろいろな思いを直接聞くことができ私もいい機会をいただいたということで、本当にありがたく思っております。

また、愛知県は何と云っても、先ほど申し上げたように 2005 年に愛知万博を環境万博として実行し、そして 3 年前の 2010 年に生物多様性条約、バイオダイバーシティの国際条約の国際会議をこの場でやって、大変大いに盛り上がりました。また来年は ESD のユネスコ世界会議というものがあります。ぜひそういった機会にまた若い皆さんの力をお借りしたいと思いますので、いろいろな機会に参加していただきたいと思います。

また、1 年を通じましては、万博会場だった長久手のモリコロパークではしょっちゅういろいろなイベントとか活動をやっていますので、特にリニモ沿線の大学の皆さんにいろいろ参加していただいていることも多いかと思いますが、ぜひ皆さんも積極的に参加していただけたらありがたいなと思います。

それから、何といても来年 11 月のちょうど今ごろに ESD ユネスコ世界会議がここにあります。この場所と栄でも会場をつくって大いに盛り上げていきたいと思いますので、またぜひ皆さんいろいろな場面で参加していただきたいと思っていますし、大いに盛り上げに一役買っていただけたらありがたいなと思っておりますので、何とぞよろしくお願い申し上げます。

ユネスコというのは、環境だけではなくて、平和とか国際協力とか人権とかいったものにも大きくかかわってきますし、また、皆さんも新聞とかで御存知かと思いますが、日本の食文化「和食」が世界文化遺産に来月登録されるんです。これは決まっています。それを受けての来年の ESD なので、大いに食というのも盛り上げていければと思っています。

和食というのは日本食という、ただ単に食べる場所だけではなくて、昨日もナゴヤドームの「ドームやきものワールド」に行ったんだけど、瀬戸とか岐阜県多治見とか土岐とか、常滑もありますけど、日本一の焼き物文化がここにもあるということなので、和食というのはいろいろな四季折々の食材、素材を生かした調理と、あとそういった陶器とかいったもので、味だけじゃなくて、目で見ながらも楽しむという、そういうまさに食文化が評価されて今回ユネスコの世界文化遺産。

世界三大料理というのは、僕は異論があるけど、フランス料理と中華料理とトルコ料理、これは全部宮廷料理なんです。この三つにプラスメキシコ料理が登録されて、今回和食で五つ目なのかな。ということなので、これは大いに誇っていいことだと思いますし、ぜひ大いに盛り上げていきたいなと思います。

ちなみに、先週パリのユネスコ総会に行きまして、夜、ユネスコ本部で部屋を借りてプレゼンテーションをやって、そこでお客さんに来てもらうためにいろいろな料理を出しました。一番のメインはお寿司。日本食と言えば寿司、世界中どこに行っても寿司。寿司にワーッと寄ってくるわけです。

私は、今年 8 月にアルゼンチンとブラジルの愛知県人会へ、5 年に 1 回県人会の総会に行くので行ったんですけど、ブラジル、アルゼンチンでも寿司が爆発的にブームになっている。どこが広めているかという、日本じゃないの、アメリカなの。アメリカ人が世界中に「日本の寿司がいい」と言って、アメリカが推すと世界に広まっていくという複雑なあれがありますけど、パワーがあるのでそうなる。今回のパリでも、パリのお寿司屋さんに頼んでやったらあっという間になくなりました。

ちなみに、名古屋めしを 4 品持っていった、PR のために。天むすと一口みそかつと手

羽先と小倉トースト。その中でどれが一番最初にばつと売れたかという、天むすでした。要は、これは寿司かと聞いて、間違えたわけじゃないけど、寿司に似ているからというので非常に受けたというのがあります。

それも含めて、来年は世界中から、日本国内もそうだけど、5,000 人を超える方がここに来ますので、環境もそうだし、持続可能な成長、発展のためにはやはり食というのも大事だと思いますから、愛知・名古屋のこの地域の食文化も大いに発信していきたいと思っていますので、そんな面でもまた皆さんにぜひぜひいろいろなアイデアを出していただいて、そしてまた協力もしていただけたらありがたいなと思っています。

いずれにいたしましても、今日はあっという間に2時間過ぎました。貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました。

またそれぞれ皆さん大学に帰って、それぞれの勉強もそうだけれども、キャンパスライフ、学生生活も大いに楽しみ、そしてまた大いに仲間をつくって、皆さん自身が大いに成長していただきたいなと思っています。

本当に今日は参加していただきまして、ありがとうございました。心から御礼を申し上げて、今日の語る会は以上とさせていただきます。

本当にどうもありがとうございました。(拍手)

【終】